

彼女（車にはねられて動けなかったメス猫）が、僕の僕の部屋にきて（拾って面倒を見ていた）約一か月が経った。怪我也すっかり良くなり、今では僕の部屋の中だけではあるが、歩きまわったり、ものの上に乗ったり、昼寝をしたりして過ごしていた。夜は、お気に入りのダンボール箱に自ら入りこんで寝ていた。拾った翌日、最初に連れて行った病院の獣医さんが『どっかで飼われていた猫かも』と言っていたが、確かにそうかもしれない。目が合えば『にゃあく』と鳴くし、用意したトイレも、教えなくても最初から使えていたし、何より座った時の姿勢が、とてもしなやかで美しい猫だった。



僕は当初から決めていた通り、いるかもしれない飼い主を探すことにした。探す方法も決めていた。

彼女を拾ったのは田舎のとある舗装道路。僕の家からは車で三〜四十分の場所だった。その現場からあたりを見渡すと、家が、ぼつり、ぼつりとある。全部で、一〇〇軒くらいだろうか。そこを一軒づつ、当たってみようと思っていた。

休日、僕は彼女を部屋に置いたまま、彼女の写真を一枚だけ持ってその場所に来た。これから一件づつあたっていくけれど、でも・・・。その時の僕は少し妙な気持ちだった。

一か月も面倒見れば、当然、当たり前すぎるくらい、情が移るなんてもんじゃない。飼い主が見つければ、それは彼女との別れ。いつそのことそのまま飼ってしまえばいい、という想いもあった。でも、彼女がいなくなつて寂しがつている（かもしれない）彼女の本当の家族の事も、気がかりだった。そんなうち付かずの気持ちのまま、僕は一軒目に向かって歩き出した。

『こんにちは。ごめん下さい。このご近所で、一か月くらい前に飼い猫がいなくなつた家をご存じありませんか？』

基本トークはこんな感じで、一軒、また一軒と回っていった。おおかたセールスでも来たかと邪険になる人も居た。でも事情を話すと、『あらまあ、それは大変ね。これ、良かったらどうぞ、頑張つてね。』と、差し入れをくれた人もいた。

その日は五〇件くらい回ったが、何の情報も得られなかった。

翌週、更に五〇件くらい、そしてその翌週、これまで留守だった家を再度回った。現場から見える家は、大体回り切ったが、飼い主は見つからなかった。ただ一軒だけ、彼女の写真を見せた時に、明らかに顔色を変えた人が居た。その家には猫が数匹居たし、その家の数件前に、『あそこの家の猫が居なくなったって言ってたような・・・』という話も聞いていた。ただ、事故の状況などを話すと、急に態度を変えて『うちの猫じゃあない!』と突っぱねた。

最後にもう一度その家に寄ろうと思ったが、やっぱりやめておいた。もしその家が飼い主だったとしても、彼女が戻っても喜んでくれない気がしたからだった。

飼い主捜索作戦は、打ち切られた。

なぜだか、ちよつと安心したような気持ちだった。



こうして、彼女は我が家の一員になった。こうなると、家族も反対しなかったし、むしろ歓迎してくれていた。ただし、犬のミーコ（第一話参照）とは生活圈を分けなければならぬので、家族は各部屋の戸締りに気を使ってくれるようになった。

さて、ペットを飼って、多くの人がまず最初にすることは、やっぱり“名前付け”だろうか。ここまで、あえて名前は付けなかったが、その日、彼女には『ニヤアコ』という名前が付いた。つけたのは僕の姉だった。

それから、ニヤアコの寝床を新調することにした。なにせ今の寝床は、ニヤアコを拾った時からずっと使っているダンボール箱。僕は近所のペットショップで、ちよつとこじやれた猫用ケージを買ってきた。そしてダンボール箱は畳んでしまった。箱の中にあつた布類などはケージにそのまま移した。

『どうだ、ニヤアコ。お前の新しい部屋だぞ!』

人間の、いや僕の心理なんて勝手なもの。当然、ニヤアコは喜ぶと思っていた。しかし、ニヤアコはその日も、次の日も、ケージに入ろうとはしなかった。

どうしてだろう・・・? 『ニヤアコ、お前、まさか、』そう言いながら、僕はばらしたダンボール箱を持ってきて、ニヤアコの前に置いてみた。するとニヤアコは、今まで見たこともないくらいいしなやかなジャンプで、ぴよんと箱の

中に入った。その顔は、なんだかとっても満足げだった。

『やっぱり・・・』

ニヤアコは、このダンボール箱が好きだった。このダンボール箱じゃなきゃ、駄目だったのだ。

『そっか、でも、なんとなくわかるよ、その気持ち』。

僕はそのダンボール箱を補修して、再び彼女の寝床にしてあげた。その夜、彼女はその箱の中で、子どもの様にすやすやと眠った。でもこの箱、どこまでもつだらうか？ 本当に使えなくなった時、ニヤアコはあきらめてくれるだろうか？

そんな風に数日が過ぎた頃、僕はニヤアコのある様子が気になって、もう一度病院へ連れて行った。時々、身体全体を使うような、大きな呼吸をするのだ。獣医さんの診断はこうだった。

『たぶん事故の時の影響で、肺と腸が癒着（ゆちやく）してしまっている。だから、食べ物や腸を通る時、肺を圧迫して少し呼吸がづらいのかも。』そして、こうも言っていた。

『あまり長くは、生きられないかもしれないね・・・今すぐとか、一カ月とか、そういうことじゃないけれど』。

それから2年が経った。ニヤアコは何度も補修を繰り返したあの箱の中で、気持ちよさそうにお昼寝している。その日は、僕の引っ越しの日。実家から車で三〇分程度の場所だったが、結婚の予定もあり、一人暮らしをするために家を出ることにした。ニヤアコはそのまま実家で暮らすことになった。

最終回へ、つづく。



イラスト：森 俊憲